中里和人
Katsuhito NAKAZATO

「エリアスタディ」地域デザインとアートの実践（2007–2021）

●抄録

エリアスタディは、2011年度に写真専攻に研究指標科目として設置され、2013年度からスタートした。その概要は、地域社会に出かけていき、フィールドワークを軸に、土地の自然や歴史を調べながら撮影を始め、地域社会の人々とのコミュニケーションを通じ、地域特質や地域資源、地域課題を発見することを目指している。その上で、地域の方々との交流や社会連携を通じ、広くデザインとアートの社会性を研究していく実践型授業である。

この授業が生まれる根幹には、東京造形大学の「デザインや美術の創作活動を、時代の精神や社会の創造に深く結び付いたものとしてとらえ，それら造形活動を広く社会的な観点から探究し，進取の気概を持って創造的に実践する」建学の精神が反映されている。

その指針に沿いながらも、大きく変化していく現代社会の中で、デザインやアートへの期待値が膨らみ、それらが担う役割や概念の拡張がおこってきていることが大きな要因であった。大学が社会的な課題に取り組み、社会の中での研究機関としての役割や存在をどう示すのか。

その問いへ向けて、デザインとアートを自在に行き来できるプラットフォーム化を目指し、地域デザインの研究を継続している。地域社会というローカルエリアからはじめつつも、地域の固有性だけにとどまらず、大きな社会やグローバルな世界と繋がっていることを思考していくことを重視している。

当研究では、地域デザインとしての思考法を持ち、フィールドワークによる観察、調査、交流をベースに、現代の社会的な課題に向け、デザインとアートの専門性と総合性の横断を重視している。フィールドワークから発見される、地域社会の自然、歴史、文化に触れ、様々な人や団体との交流や社会連携を包摂しながら、成果展としてイベント、シンポジウム、ワークショップなどを実践してきている。

エリアスタディは、デザイン学科に置かれた写真専攻の特色を活かし、写真中心の自己表現にとどまらず、個々人が社会とダイレクトに関わり、新たな写真の意義を見つけ出すことを意図している。

さらに、これからの社会を形成し変革していく独創力、構想力、イノベーションを想定できるリテラシーを培うことを目指し、社会的なLABOとしての写真研究を実践している。その実践記録の記録集である。

はじめに

エリアスタディは、2011年度に写真専攻に研究指標科目として設置され、2013年度からスタートした。研究概要は、地域社会に出かけていき、フィールドワークを軸に、土地の自然や歴史を調べながら撮影を始め、人々とのコミュニケーションを通じ、地域資源や地域課題を発見することを目指している。その過程で、地域の方々との交流や社会連携を通じ、広くデザインとアートの社会性を研究していく実践型授業である。

この授業が生まれる根幹には、東京造形大学の「デザインや美術の創作活動を、時代の精神や社会の創造に深く結び付いたものとしてとらえ、それら造形活動を広く社会的な観点から探究し、進取の気概を持って創造的に実践する。」建学の精神が反映されている。

その指針に沿いながらも、大きく変化していく現代社会の中で、デザインやアートへの期待値が膨らみ、それらが担う役割や概念の拡張がおこってきていることが大きな要因であった。大学が社会的な課題に取り組み、社会の中での研究機関としての役割や存在をどう示すのか。

その問いへ向けて、デザインとアートを自在に行き来できるプラットフォームとしての授業を目指し、地域デザインの研究を継続している。ローカルエリアからはじめつつも、地域の固有性だけにとどまらず、大きな社会やグローバルな世界と繋がることを研究していくことを目指している。

「エリアスタディ」が生まれてきた時代状況

戦後の日本では、1950年代から1970年代にかけて高度経済成長を経て、その後1980年代から1990年代のバブル景気で経済的な頂点を迎えた。その過程で高度な資本主義経済が隅々まで浸透し、大都市が膨張し続ける中で、過疎化現象や地方の衰退化が起こってきていた。

1990年代に入るとバブル経済が崩壊し、暮らしやコミュニティの中にあった課題が強く出始めてきた。

ふり返ると我が国の戦後の復興では、国の政策として日本の国土利用、保全に関する全国総合開発計画が1962年に示され、その後も次々に全国規模での開発、保全に関する計画が出され進行していった。しかし、バブル経済崩壊以降は、少子高齢化現象とも重なり、それまでの量的拡大を図る開発計画から、国土の質的向上を目指す計画へと転換されていった。

1990年代半ばから、日本では大きな開発の速度が遅くなり、文化的な事業への資本も鈍化していく中、注目されていったのが、既にある建造物や地域資源の掘り起こしだった。建造物をスクラップし新たな物を作るのではなく、そこにある古い空き状況の工場、学校、商店、古民家などを再利用し、リノベーションと再生に向かう流れができていった。

そんな時代状況の中で、地域社会における様々な課題がクローズアップされ出し、ローカルな視点を持ちながらグローバルな世界との連関性を考えていく時代が到来してきたのだった。

それらの課題に対し、疲弊した地方の現状に目を向け、いち早く活動を始めたのがアートとデザインの世界であった。

その中から、地方でのアートイベントを中心に、いくつかの事例を見てみたい。2000年から始まった新潟県越後妻有での「大地の芸術祭が」では、地方の自然や歴史や環境を文脈化して、土地の資源をアートの視点から捉え直したアートイベントが始まった。トリエンナーレという３年に一度の開催形態で、地域のコミュニティと協働しながら現在まで継続されてきている。

その結果、新潟県の山間地にある廃校、廃屋、十日町市を中心にした市街地の空き店舗などを舞台に、地方の課題をアートによって活性化させる活動を実践してきている。そのアートイベントのエリアは広く、それぞれの作品を鑑賞しながら、野山の自然環境、温泉や飲食店での文化を巡り歩く、アートと観光が緩やかに結びつく試みともなっていった。

規模は小さいものの、同じく2000年に東京都墨田区向島でも、空き家になっている長屋や町工場、空き地を起点にしたアートイベント「向島ネットワークス」と「向島博覧会」が開催された。アーティスト、建築家、まちづくり系の人や地域住民を巻き込んだアートイベントで、まちが持っている様々なポテンシャルをアートで再発見する動きが起こり、それまで知られていなかった東京の東側にあった旧市街に光があたった。向島でのアートイベントは形を変えながら、現在は「すみだ向島

EXPO」となって継続されている。

向島では21年間にわたるアートイベントの活動が、徐々に社会的な広がりを見せていき、イベント終了後に多くの若者やアーティストが向島に住み出し、新住民によるカフェやアトリエや民泊など20件以上の施設が次々に生まれてきている。家賃が安く、自由にリノベーションができる空き物件のある場所性から、向島では東京の下町フロンティアという状況が生まれてきている。

同じく2000年、山梨県富士吉田市では「まちがミュージアム」という、シャッター通りになった旧市街に点在する空き店舗を活用したアートイベントが始まり10年間続けられた。

著者も「大地の芸術祭」2012、2015に参加、向島のアートイベントにも2000年の始まりから５度参加、富士吉田のアートイベントにも２度参加している（著者の大学研究報22に「大地の芸術祭」、「向島ネットワークス」、「向島博覧会」の記述あり）。

各地のアートプロジェクトの現場で制作しながら研究と制作を深めていった。

そこでは、展示場所となった空き長屋、工場、学校などのオルタナティブな空間と、その場所のある地域社会とのインタラクティブな関係性の中で、自己表現と社会的価値との相関性を文脈化させることが命題だった。そこには、サイトスペシフィックの視点からのインスタレーションが重要になり、現在よく語られるデザインシンキングとアートシンキングを横断させ、地域の中で社会的テーマを見つけ表現していくダイナミズムさがあった。これら著者の実践経験を、2013年度から始まったエリアスタディにフィードバックさせ、デザインとアートを実践しながら、写真と社会との通路をいかに作り出すかを実践していった。

写真というメディアが置かれている状況とその享受

写真というメディアを取り巻く状況を少しふり返ると、1826年に写真が誕生してから200年ほどの歴史の中、ここ10数年が最も激しい変遷を経てきている。アナログイメージングからデジタルイメージングへの変遷は言うに及ばず、紙媒体での発信からネット空間でのイメージ発信、さらに仮想空間でのバーチャルなイメージが、リアルなものと感じられる感受性の変容まで生じてきている。ネット空間を行き交う情報や写真イメージが、どこまでも広がっていくことで脳を肥大化させ、世界の認識における身体的な制約やノイズが限りなく小さくなっていくように思われる。

1980年代以降1995年までに生まれた世代をミレニアル世代と呼ぶ。デジタルの台頭とともにあり、インターネット環境の整備が飛躍的に進んだ時代に育ち、情報リテラシーに優れ、インターネットでの情報検索やSNSを利用したコミュニケーションを使いこなせる世代である。

その後に続くのが、1996年以降に生まれたZ世代である。デジタルが当たり前の時代に生まれてきたことから「デジタルネイティブ」とも呼ばれている。そこにおいては、世界に置かれている情報はネット検索すれば、画像を含めて膨大なデータ量として享受される。現実の中でのリアリティを醸成していくのは、さまざまな情報でできた柱やパーツを組み立てていくことで、建物として即座に見え出す実相であると思われる。

その状況は、インターネットの中に数多の情報を並べるコンビニエンスストアがあるようなものである。しかし、コンビニに置かれている商品が緻密なマーケティングにより、どこも似たような棚揃えになっているように、インターネットの中にある写真、画像の多くは、金太郎飴のように似たイメージを氾濫させているように思われる。

地域社会でのフィールドワークを中心にしたエリアスタディでは、現場を巡り写真撮影するという身体的行為により、現実に出会った空間、人、オブジェクトなどを目で確認し、手でも触れる、現物との接触から始まる。そこには、調査、観察、会話を通じ、現場でしかつかめない多くの見えなかった事象、ネット検索にかからないリアルな発見が包摂されている。

社会連携の多様性

エリアスタディは、社会との交流と社会連携を研究目的の一つに掲げている。

社会連携先というと、まず産業との連携を推進する産学連携がある。他に、行政や教育機関、財団、NPO組織など公共性のある団体との連携。個人商店や各種地域活動グループなどの小さな連携など、社会連携先には多様性が見られる。

特にエリアスタディでは、相手の顔が見える社会連携を重視し、具体的なコミュニティの住人と

の交流を基軸に、撮影や研究を実践してきている。

写真専攻においては、他のデザイン専攻のプロダクト系の特質である産学連携の社会連携は少なく、地域社会に暮らすコミュニティの方々とのダイレクトな社会連携が主要になることが多い。

そこで、社会連携における重要なポイントは、交流がスムーズにいく連携先の方々とよく話し合い、その過程で地域社会に内在する魅力や課題を見つけ出し、成果としてデザインとアートを駆使した発表や提案を実践していけることである。そこでは、社会との共有、協働の思想を学ぶことを重視し、新たに地域社会を読み解く提案（コンテクスト化＝物語化）や写真における専門性、表現性を研究することを目指していくことになる。

エリアスタディが目指す教育的価値

A．総論―地域デザイン創出に向けて

・総合性（学際的横断、発表場空間、デザインとアートなどで総合的な表現力を培う）
・連携性、協働性（産学連携、個人や団体との連携、協働などで社会性を培う）共有性（授業プロセスでの講評やデザインシンキングでの価値観、課題共有を通じプレゼンテーション力を培う）
・双方向性（地域社会との双方向コミュニケーション力を培う）

B．各論

・フィールドワークでの調査、撮影
・デザインシンキングと講評
・景観やコミュニティの新たな読み解き方の提案とコンテクスト化
・地域・社会のコミュニティに内在する地域資源、課題の発見や提案

●方法論

A．デザインシンキング（地域デザイン）的思考方法

地域社会の中にある社会的課題解決に向けた提案を目指す。

①トポスデザイン　（断片性）地域にある具体的な場所性、景観のオブジェクト性。
②コンストレーションデザイン　（ライン性）①の断片的な点をライン（線）として考えていく。
③ネットワークデザイン　②のラインをさらに星座のように文脈化＝物語化して、地域デザインと特色を視覚化、提案していく。地域資源の価値化。

B．アートシンキング的思考方法

明確な課題や目的は持たず、現場での地域資源の発見を最優先させ、新たな価値やビジョンを目指す。

シリアスな社会的テーマだけでなく、遊びの要素、実験の要素も大切にする。

エリアスタディの授業特色

座標軸として、縦軸に自己表現と社会性、横軸にデザインとアートを置き、フィールドワークを主体に、コミュニケーション力を駆使しながら、デザインやアートの力を発揮し、広く社会的なテーマに取り組んでいく授業である。

そこでは、社会との共有、協働の思想を学ぶことを重視し、新たに地域社会を読み解く提案（コンテクスト化＝物語化）や写真における専門性、表現性を研究することを目指している。写真専攻に置かれ10年目を迎えるエリアスタディの研究を総括し、これからの大学が果たす社会的な動向を鑑み、他大学の写真教育にはない自己表現の社会的な実践に関し記述していきたい。

これまで述べてきた総論に沿って、写真資料を駆使しながら、これまでの授業実践の記録や検証を中心にまとめていくこととする。

プレエリアスタディ　2011年度～2012年度

エリアスタディの授業は、2011年度に設置され2013年度から開始された。前段階のプレエリアスタディという位置付けで、社会との連携や交流を視野に入れ、地域の中で社会交流を実践するハイブッリッド授業「フォトグラフィックプロジェクト」がエリアスタディ的取り組みを開始させた。

1．2011年度

フォトグラフィックプロジェクト（ハイブリッド授業）の授業として、八王子市内にある神宮写真館（明治10年開業）から、10年前に現役を退いた肖像写真用大型カメラ“アンソニー”を譲り受け

八王子織物工業組合ロビーをスタジオに変え、アンソニー（中央のカメラ）で市民撮影をするワークショップを開催

アンソニーで撮影した学生の作品

たことから授業が始まった。アンソニーは、戦前、戦後と何十年もの間、町に暮らす人々の記念写真、肖像写真を撮り続けていた。神宮写真館のご主人を大学スタジオにお招きし、カメラの操作をはじめ、その歴史や写真館での写真の歴史をレクチャーしてもらい、記念写真とは何かを学んだ。その後、レトロカメラで学生たちのポートレイト（肖像）撮影に挑戦し、12月に成果展として「レトロカメラが捉えた現代の肖像」写真展を、町の歴史や記憶を体感できる八王子繊維貿易館（昭和29年建築）で実施した。会期中、同会場でマフラー、ネクタイフェアが開催され、会場に多くの市民が訪れ、学生たちの肖像写真には大きな反響があった。

ワークショップでは、アンソニーカメラを展示会場エントランスに運び入れ、仮設写場で市民を撮影しプリントを手渡すワークショップを実施。参加者の中に、かつて神宮写真館のアンソニーカメラで記念写真を撮られた人もいた。多くの参加者は口々に町や家族の思い出を語り出し、写真がコミュニケーションを促進させ、記憶を再生させる装置であることが実感できる、市民交流ワークショップとなった。

社会連携先：神宮写真館、八王子織物工業組合
取材媒体：テレメディア八王子

2．2012年度

フォトグラフィックプロジェクト（ハイブリッド授業）として、八王子の町を撮影し、デザインとアートを駆使したZINE（手作りアートブック）にまとめ、「Hachioji ZINE」と題したブック展と写真展を開催。空きテナントでアート活動を実践し出したNPO法人「AKITEN」と社会連携し、オルタナティブな空きテナント空間を写真展会場に作り替え、八王子駅前の活性化をめざした。地域資源の再活用を実践した展覧会には、多数の市民来場者があり、八王子で見出した新たなイメージが、地域の魅力発見に繋がることを提案した。

社会連携先：NPO法人AKITEN

●社会連携先の「AKITEN」

NPO法人AKITENは、八王子駅周辺の空きテナントをアートスペースとして活用し、アート作品を楽しみながら街を巡り、空きテナントを抱える商店街にも人々が足を運ぶ仕組みを構築していく、地域に根ざしたアートプロジェクト。及川賢一代

八王子駅前商店街ユーロードに面した空きテナントでの「Hachioji ZINE」展

AKITENのイベント告知フライヤー

表のもとで2012年に始まり、アーティスト、デザイナー、大学、商店主など、専門家と市民が協働し、地域の活性化を目指す活動をしている。現在では食にまつわるイベント、子育て支援などにも活動領域が広まっている。社会的な課題解決に向かって、独創的な地域デザインを作り出す様々な活動をしている団体である。

3．2013年度　エリアスタディプロジェクト

これからの社会での新たなライフスタイルとは何かという問いに対し、RE（再生）をテーマとした。各自が関心を持ったREの現場を見つけ出すきっかけとして、REの現場をフィールドリサーチした。谷根千エリア（東京台東区谷中根津千駄木）の古民家再生ギャラリー、店舗、事務所。福生市米軍住宅エリア。昭和初期建築の日本橋茅場町森岡書店。セルフビルド建築の調布市カフェギャラリー、元工場をリノベーションした西八王子カフェバー、日本橋大伝馬町にあるデザイナー、キュレーターなど様々な団体やクリエータが共有するコワーキングスペース、埼玉県杉戸町の水域環境保全に取り組む現場などを巡った。

REの現場を見学、撮影し、2013年6月、埼玉県杉戸町の水域環境保全に取り組む会社木土水と社会連携し、学生が発見した地域の景観資源を、宮ノ下集会所で町民に向けたスライドショーで発表をした。

2014年1月、エリアスタディプロジェクト展「Re×photography」で、写真展、アートブック展を実施。NPO法人「AKITEN」、エステイター株式会社と社会連携し八王子駅前の空きテナントを会場に、地域住民を招いたオープニングとシンポジウム「八王子のまちづくりとアートプロジェクト」を開催した。

社会連携先：NPO法人AKITEN、エステイター株式会社、木土水
協力：OK-3ビル

調布市の古民家をリノベーションしたカフェ「niwa-coya」見学

埼玉県杉戸町の公民館で地元を撮影した作品のスライドショーを実施、地域住民の方々との交流を行った。

4．2014年度　エリアスタディプロジェクト

2014年10月、NPO法人AKITENと不動産会社エステイターと社会連携し、八王子エリアで発見した風景を絵ハガキセットにまとめ、エリアスタディプロジェクト展「絵ハガキになった八王子」を行った。絵ハガキ制作では観光スポットという概念に捕われず、八王子で近郊農業をおこなっている菱山農園をフィールドワークしたり、八王子の風景やオブジェクトを絵ハガキという地域デザインにした。併せて市民交流を目指すワークショップを開催した。

社会連携先：NPO法人AKITEN、エステイター株式会社、菱山農園

●ワークショップ

絵ハガキ用のモノクロ写真に、自由に色をつけてもらう手彩色絵ハガキワークショップを実施。さまざまに彩色された八王子の絵ハガキは、住民の方の町の記憶を語り出す場にもなった。制作された手彩色絵ハガキは会場に展示した。後日郵便で送付する、コミュニケーションを作り出すワークショップとなった。

八王子市菱山農園でのフィールドワーク

菱山農園で収穫された作物をご馳走してもらった。

ワークショップ風景

空きテナント（八王子駅前ひまわりビル4F）を利用した写真展

5．2015年度　エリアスタディプロジェクト

2015年度は、12月に八王子市いちょうホールギャラリーで、エリアスタディプロジェクト展「風景の地層　甲州街道八王子商店街」を開催。

八王子発祥の地である駅北周辺のランドスケープは、新旧様々な風景が地層のように堆積していた。近年その商店街の変貌が著しく、街道の風情であり歴史である個人商店や看板建築が消え、マンションや商業ビル、駐車場に次々と変わっていた。そこで、この甲州街道沿い商店街を中心に八王子の町の魅力を残して記録してほしいという地元商店主（うさぎや 小俣能範氏）からの要望があり、街の商店主さんたちの協力のもと撮影に取り組んだ。写真機を持って街を観察する学生たちは、考古学者が地中から貴重なお宝を発掘するように、現代の街に幾層にも降り積もった風景から、景観資源を発掘しようと試みた。

中でも甲州街道商店街をスキャンしながら巻物ランドスケープにした石田宗一郎の作品は、長さ10メートルの写真に2キロに及ぶ商店街が写された大作になった。多くの市民が商店街写真の前で自分の暮らす街を語り出し、街の日常を振り返る契機を作り出した。市長や教育長の来場もあり、写真を通じた市民交流が行われ大盛況の成果発表となった。

社会連携先：うさぎや

協力：イツミヤ、まつおか書房、桃屋美術、及川賢一（NPO法人 AKITEN代表、八王子市議会議員）、小俣能範（うさぎや代表取締役）、田中正國（M/N/R マーケティング クリエーター）、村松英二（元 八王子市史編纂審議会委員）、落合伸彦、落合麻友

●シンポジウム

2015年12月スライドトークショー＆シンポジウム「八王子の風景力」を開催。登壇者は、及川賢一（NPO法人 AKITEN代表、八王子市議会議員）、小俣能範（うさぎや代表取締役）。八王子の風景力を話し合い、過去と現代のソーシャルランドスケープの推移から、景観を記録保存するアーカイブスとしての写真の意義や、これからのまち作りにフィードバックされる景観のあり方を話し合い、

展示用フライヤー

「風景の地層」展（八王子市いちょうホールギャラリー）

八王子の街のアーカイブとして、市民が収蔵していた古写真を展示

シンポジウム「八王子の風景力」（八王子市いちょうホールギャラリー）

「八王子の風景力」展に集った学生と市民の方との記念写真

八王子の甲州街道が持続してきた景観の魅力が提案された。

6．2016年度　エリアスタディプロジェクト

2016年度は少し遠出をして、山梨県西桂町での活動となった。目の前に富士山を仰ぐ西桂町は繊維産業が盛んで、その湧水をはじめ豊かな自然に恵まれた町である。山梨県西桂町教育委員会、西桂織物工業協同組合と社会連結し、地域おこし協力隊寺田哲史氏の協力で、町歩きや工場見学を行い、何度も現場を訪れ地域資源の発見を繰り返した。

同時に、地域との交流を目的にした日光写真親子ワークショップを開催。地場産業である繊維の会社から、西桂産の布をもらいうけ、その布を写真用印画布として作り替え、地元の機織り道具類、畑での収穫物などをモチーフに、青い日光写真を制作した。10月には西桂町役場の協力のもとエリアスタディプロジェクト展を開催し、西桂町民文化祭で町民の方々と共にイベントを行い、日光写真に転写された地域の魅力について活発な意見交流を行った。

日光写真をワークショップを通じ、町の自然や産業が作品化され、授業が目指していた地域デザインとアートの総合が実践されたのだった。

その後、傘を制作する槇田商店からの依頼があ

西桂町民文化祭での展示（西桂町きずな未来館）

西桂町での活動記録と学生作品をまとめた記録冊子を刊行

西桂町の田園風景

織物の地場産業を取材した。

槇田商店にて繊維産業の解説を受けた。

り、西桂オリジナルの日光写真日傘を地域デザイン成果物として誕生させた。

社会連携先：山梨県西桂町教育委員会、西桂織物工業協同組合

協力：西桂町役場、株式会社槇田商店、武藤株式会社、あしたばガラス工房、わっぱファーム、地域おこし協力隊寺田哲史

7．2017年度　エリアスタディプロジェクト

「向島百景展」フライヤー

2017年度は、東京都墨田区京島で、古民家をギャラリー、レジデンス施設、シェアハウスなどに再生させ、地域再生プロジェクトに取り組んでいる京島の長屋を考える会、墨田スタジオネットワーク、不動産会社エイゼンの方々と社会連携を行った。

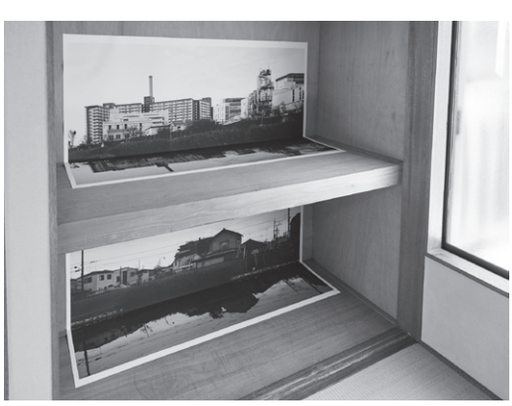
関東大震災直後に建てられた築93年の京島長屋群の一部が、2018年4月以降に取り壊される予定だった。長屋解体前のエリアスタディプロジェクト展を皮切りに、2018年1月9日から3月31日までの82日間にわたり〈京島長屋82日プロジェクト〉が動き出した。

授業では2018年1月、京島の長屋を三軒借りて、エリアスタディプロジェクト「向島百景」展を開催。向島地域にある町工場、旧中川、古い民家の窓などをテーマにした作品展示。清水健太（早稲田大学大学院）による京島エリアの歴史的変遷のクロニクルの壁面展示し、都市景観とコミュニティについての記録や写真表現を行った。長屋の歴史的でオルタナティブな空間性を読み解き、サイトスペシフィックの視点からインスタレーション展示を行った。

2018年1月13日「景観とコミュニティ」をテーマにしたシンポジウムでは、長屋の中での学生のスライドショーの他、後藤大輝（京島の長屋を考える会代表）、齋藤佳（ドンツキ協会会長）、向山直登（明治大学大学院）を招いた。そこでは、東京大空襲で壊滅された下町エリアの中で、奇跡的に戦災を免れた京島一帯の長屋群が、戦前の東京の庶民の暮らしやコミュニティの在り方を残す貴重な景観で、東京の中に残された地域景観資源としての価値があり、その保存や活用に関しての提案型シンポジウムとなった。

シンポジウムを要約すると、①戦災を免れた京

向島特有の景観としての長屋群（築90年）が写真展会場になった。（左・右）


地元を流れる旧中川を撮影し、押入れにインスタレーションされた田村連の作品

近所の町工場を取材撮影し、小部屋中に写真を配置した河野光希の作品

島一帯は、戦前からの東京下町の長屋景観を今に残す貴重な景観資源としての価値がある。②長屋は隣近所との密な交流ができる建築構造で、地域コミュニティとの絆を継続させる機能を持っている。③長屋を代表とする向島(京島)特有の景観を、地域住民や、ここに拠点を持とうとする人と共に、未来に残し、繋げたりする活動をしていきたいというものだった。

全てを新しいモダンな建築や、まち景観に変えるのではなく、その土地が積み上げてきた歴史や文化を基軸に、既にある古くからの景観の中に、地域デザインとしての価値をいかに接木していくかが重要であることが語られた。

地域デザイン研究を目的にしているエリアスタディにとって、地域の景観資源として残る長屋空間で、地域でまちつくりを担う方々との意見交換を行ったことは、この町にある課題や、未来に向けた展望を共に考えていく社会の中での学びとなった。

社会連携先：京島の長屋を考える会、京島長屋82日プロジェクト

協力：(株)エイゼン、阿部製作所、玉垣製作所、清水健太（早稲田大学大学院）、齋藤佳（ドンツキ協会会長）、向山直登(明治大学大学院)

8．2018年度　エリアスタディプロジェクト

2018年度は青梅市をフィールドに研究活動をおこない、写真展や動画作品上映、音楽と映像のコラボレーションイベント、まち歩きワークショップなどを展開した。青梅市で盛んだった繊維産業の倉庫をリノベーションしたダイニング&ギャラリー繭蔵での12月の成果展では、写真インスタレーション、ZINEの展示、織物産業の歴史や町の変遷についてインタビューした動画作品発表で、青梅の町の地域資源を発見した。

関連イベントとして、作品の撮影地を学生解説と巡るまち歩きワークショップを行い、地域住民や地元高校生に、まちの魅力を解説して回った。写真表現として、まちのどこに焦点を当てると物語が生まれてくるのか、現場でのレクチャーにもなった。繊維工場を改装したSAKURAファクトリーでは、履修学生が活動している音楽バンドAGU、ハイエナカーによる、青梅の写真映像とコラボレーションした音楽ライブを開催。展覧会場前にあるBOX KIOKUでは、青梅産梅ジュース、

昭和30年代頃まで盛んであった繊維産業の工場を見学。社会連携先代表の方との記念撮影

繊維製品倉庫だった蔵を改装したダイニング＆ギャラリー「繭蔵」の展示、インスタレーション

軽飲食ミニパーティを兼ねた市民交流会も行った。

それらの成果発表展や関連イベントを通じ、次世代にバトンしたい青梅の場所の特性を記録、表現し、地域デザインとしての提案を行った。

社会連携先：青梅市織物工業協同組合、ダイニング&ギャラリー繭蔵、青梅市役所商工観光課、(株)まちつくり青梅　協力：青梅市郷土博物館、キヤノンマーケティングジャパン（株)、銀嶺、夏への扉、AGU、ハイエナカー

●2018年度開催の地域でのアートとデザイン実践者のゲストトーク

この年度は、日本各地でデザインやアートの文脈で創作活動や実験的な社会活動をしている方々に、現場からの報告をしてもらった。

- 安藤竜二…NPOエコミュージアム代表（山形県朝日町)。既に地域の中にある自然、歴史、産業、コミュニティそのものを地域資源と捉え、住民が学芸員となり、地域の中の魅力を再認識し、外に向けて冊子、ウェブサイト、ワークショップを通じて発信。自己と地域との連関性やコミュニティ内でのアイデンティティの確認を行ってきているエコミュージアムの実践報告。
- 林茎子…田並劇場再生（和歌山県串本町)。か

つて、アメリカ村と呼ばれ多くの海外移住者を送り出した和歌山県串本町田並で、放置されていた元劇場を再生させ、新しい地域コミュニティや文化発信拠点として再生させた活動のスライドトークショー。地域の中で住民が集う〈場〉の復興と、文化的交流のサードプレイス化への取り組みの報告。

・EAT&ART TARO…大地の芸術祭、瀬戸内国際などをはじめ各地の芸術祭で、食をテーマにしたコミュニケーションアートを実践する報告。日常の暮らしに存在する場と食の関係性や固有性を読み解き、アート作品を創造していく概念（コンセプト）や、そのなかで作られるコミュニケーションとアート（特に遊びとの観点）の連関性に関するレクチャーをしてもらう。

・高山慎二…地元青梅市内の店や店主などのドキュメンタリーフォトを制作している作品紹介。オリジナルプリントを見せてもらいながら、写真による町や人へのアプローチなどの基本的な考え方をレクチャーしてもらう。

9．2019年度　エリアスタディ

2019年度も青梅市をフィールドに、多摩川の自然、町並み、商店などのリサーチや撮影を行った。

写真展会場繭蔵での講評

青梅の土地から生まれたキャラクター「おうめうお」。おうめうおTシャツを着て市内で撮影を実施、新しい地域デザインの研究に取り組んだ髙橋友喜子の作品。

山下莉奈、樋口知美、獅子野幸輝が青梅を取材して発刊したローカルリトルプレス

「青龍kibako」で写真を語り合う市民交流ワークショップ「ZOKEI Photo Cafe」

青梅在住の写真家・宮﨑廷氏宅で戦後70年ほど撮りためた写真解説を聞いた。

かつて栄えた織物（夜具地）産業に着目した地域デザインの提案や、ゆるいキャラクター「おうめうお」を生み出し、絵本やTシャツなどのデザイングッズを制作展示し、ギャラリー売店で販売した。青梅のカフェを特集したリトルプレス「うめごと」を発刊し、市内カフェやギャラリーに置かせてもらい町の魅力を発信した。

戦後70年にわたり、地元青梅の写真を撮り続ける宮﨑廷さんのお宅にお邪魔し、青梅の町の歴史的な変貌や、写真の光景などをレクチャーしてもらった。現代から消えてしまった、過去の青梅の自然や、町並み、行事などを見せてもらい、改めて写真が記録を残す優れたメディアであることを学ぶことができた。

写真展会場となった青龍kibakoのカフェでは、市民と写真を語り合うワークショップを実施し市民との交流が生まれた。

12月の成果発表展では市内三ケ所の会場（ギャラリー繭蔵、青龍kibako奥の蔵、青梅市文化交流センター）を使用。３ポイントの会場を結びつけ、地域内で町の景観をネットワーク化した発表にも挑戦し、より社会に広がりのある研究発表を試みた。ギャラリー繭蔵、青龍kibakoの蔵を発表会場とし、ホワイトキューブでないオルタナティブな場空間を読み込み、ZINEの制作展示と写真のインスタレーション展示を行った。

社会連携先：ダイニング＆ギャラリー繭蔵、青龍kibako、青梅織物工業協同組合、フォトカジェー

後援：青梅市　協力：榎本祐典、宮﨑廷、向貞江

10. 2020年度　エリアスタディ

展示：エリアスタディプロジェクト展 青梅

会期：2020年12月10日（木）～ 12月23日（水）

会場：ダイニング&ギャラリー繭蔵、青龍kibako奥の蔵

後援：青梅市

協力：ダイニング&ギャラリー 繭蔵、青龍kibako、青梅写真連盟、青梅写友会、ネットワーク 青梅写真界、「写真展・青梅」をつくる会、榎本祐典

2020年度展覧会フライヤー

2020年度は青梅での活動が３年目を迎えた。前期授業はコロナ禍でオンラインだったため、現場のフィールドワークが出来ず、webサイトで青梅を調べ、故郷にいた学生には各自の故郷のリサーチをしてもらい、それぞれの地域特性を調査、発表してもらった。後期授業では対面授業が再開され、青梅市をフィールドワークしての撮影が始まった。青梅市のランドスケープを記録した写真に混じって、かつて栄えた織物（夜具地）の写真やア

繭蔵での展示風景

元玩具屋の蔵をギャラリーにしたスペースでの写真インスタレーション（青龍kibako奥の蔵）

クセサリーによるリデザインなど、地域の産業と歴史と写真とが融合していく取り組みも始まった。

12月にギャラリー繭蔵、青龍kibakoの蔵での成果展では、多摩川支流の新しい水中写真などの表現を中心に、青梅産織物（夜具地）を写真転写したアクセサリー、狭山茶染めの写真など、青梅を題材にしたデザインやアート作品が次々に生まれてきた。

地域との交流では、地元写真団体「写真展・青梅をつくる会」の方々と、市内ボッパルトーホールで共同写真展を開催。青龍kibakoでは青梅写真連盟との共同企画展を開催。この年は、地域で活動を続ける写真団体との活発な連携を行い、広く我々の制作した写真を社会に広げる手法を実践した。

社会連携先：ダイニング&ギャラリー 繭蔵、青龍kibako、青梅写真連盟、青梅写友会、ネットワーク 青梅写真界、「写真展・青梅」をつくる会

後援：青梅市

11. 2021年度　エリアスタディ

展示：エリアスタディプロジェクト展 新青梅観光「梅の記めぐり」

フィールドワークで、青梅の市街地から多摩川に連なる河岸段丘を下る。

青梅市で発行したリトルプレス「うめろく」

商店の人達から取材をするリトルプレス「うめろく」制作チーム

ギャラリー繭蔵での写真展、インスタレーション

会期：2021年12月9日（木）～ 12月22日（水）
会場：ダイニング&ギャラリー繭蔵、青龍kibako　奥の蔵
後援：青梅市
協力：ダイニング&ギャラリー 繭蔵、青龍kibako、青梅写真連盟

2021年度は、青梅での活動が４年目を迎えた。活動テーマを「新・青梅観光　梅の記めぐり」とし、山間の石垣集落、野鳥、御嶽駅周辺の多摩川の岩、古くからある商店と商店主など、魅力的な青梅景観の多様な表現を行った。

地元取材を中心に雑誌を発行するチームは、青梅で出会った写真家の人の協力もあり、調査、取材、撮影、編集に重きを置いた「うめろく」を発行した。

12月にはギャラリー繭蔵と青龍kibako蔵の２会場で写真展を開催した。 同時期に地域交流展として、青龍kibakoのカフェと繭蔵で、青梅写真連盟の写真展との共同企画展も開催した。

担当教員：2013年度～2021年度　中里和人。2017年度より教員２名体制となる。2017年度、2018年度　北野謙、2019年度、2020年度　中野純、2021年度　鷹野隆大との２名体制で授業を実施した。

おわりに

エリアスタディの方法論には、アートとデザインを横断させ、地域社会の中にある課題解決に向かうアートコレクティブとの類似性が見られる。

また、ヨーゼフ・ボイスが概念化したファインな作品制作とは一線を画し、自らの意思で社会に関わり、未来を造形していく「社会彫刻」の考え方とも親和性があると考えている。

そこに共通してあるのは、社会環境から発生する人と人、人と物との関係性から構築される新たな概念の探究であり、自己表現を社会と連結させていく中で創出する方法論である。

最後にアートコレクティブの実例として、2022年にドイツのカッセルで開催された現代美術展「ドクメンタ15」の芸術監督に、インドネシアのアートコレクティブのルアンルパが迎えられたことに触れておきたい。彼らが芸術監督に起用された流れは、現代美術の領域がファインな芸術の他に、より社会的なテーマ性を持ったデザインシンキングの方向へシフトする予兆として捉えることができる。

ルアンルパは、2000年に現代美術家を中心に６名で結成された。彼らは経済的な支えが小さい中

で、ローカルな社会的課題を協働しながら地域社会との接点を広げ、課題解決に向かう様々な活動をアートコレクティブとして実践してきている。

具体的には、展覧会、ワークショップ、フェスティバルの開催、オルタナティブメディアとしての雑誌やコミュニティラジオなどの創作。さらに、アートラボを立ち上げ、都市の社会問題の調査、研究など、その活動は多岐にわたっている。

彼らの前提となるのが「ノンクロン」という、インドネシア語で仲間とぐだぐだとおしゃべりをする事である。いつでも「ノンクロン」のできる、対話の時間と空間が共有され、地域とつながる開かれた場所を設定してきていることがあげられる。

彼らの多くが、アーティスト、キュレーター、教育者、アクティビストなど多様な活動要素をこなし、領域を限定せずに社会状況に応じた活動を有機的に展開してきているのである。

複数の構成者からなるアートコレクティブのルアンルパは、社会と接点を持つ日々の会話から生まれるビジョンを、具体的な社会活動としてデザインとアートとして文脈化し、課題解決を目指している現代的な活動体である。

まさに、エリアスタディという授業研究も、地域社会（ローカル）にある様々な資源や課題を発見し、世界（グローバル）にデザインとアートを駆使し連結していくプロジェクトという点で、アートコレクティブの活動に酷似している。

当研究では、地域デザインとしての思考を持ち、フィールドワークによる観察、調査、交流をベースに、現代の社会的な課題に向け、デザインとアートの専門性と総合性の横断を重視している。フィールドワークから発見される、地域社会の自然、歴史、文化に触れ、様々な人や団体との交流や社会連携を包摂しながら、成果展として写真展、シンポジウム、ワークショップなどを実践してきている。

エリアスタディは、デザイン学科に置かれた写真専攻の特色を活かし、写真中心の自己表現にとどまらず、個々人が社会とダイレクトに関わり、新たな写真の意義を見つけ出すことを意図している。これまでの写真表現の研究にはなかった、現代の社会が希求するデザインとアートと社会とを繋ぐ、プラットフォームを作り出す方法論を探究しているとも言える。

その先に、これからの社会を形成し変革していく独創力、構想力、イノベーションを想定できるリテラシーを培い、社会的Lab.として現場での写真研究を実践していくものである。

Re（再生をテーマにした活動研究／ 2014年度）

Re（再生）の現場を巡る。東京都福生市の米軍ハウスをリノベーションしたアトリエ訪問。

米軍ハウスを拠点にした、美術家水田典寿氏のライフスタイルの話を聞く。

東京都稲城市の里山保全の活動をする、写真専攻卒業生井手大氏から保全現場で話を聞く。

東京都八王子市（NPO法人AKITENとの社会連携／ 2015年度）

エリアスタディ成果展。壁面左の作品は、甲州街道の片面2キロ商店街をロールにした石田宗一郎の写真。（八王子市いちょうホール）

八王子駅前空きテナントでの写真展示。空きテナントを活用し町の活性化を図るNPO法人AKITENとの社会連携プロジェクト。

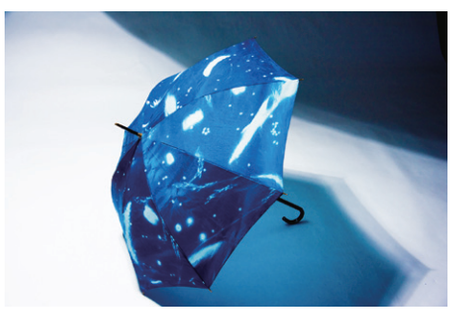
シンポジウム「八王子の風景力」（八王子いちょうホール）

山梨県西桂町（西桂町役場、織物会社との社会連携／ 2016年度）

日光写真（サイアノタイプ）ワークショップの様子。

町で生産された布に、町の農作物や織物の部品を転写する、日光写真（サイアノタイプ）ワークショップを開催。完成した写真作品。

西桂町民文化祭での展示と市民交流。



日光写真ワークショップから製品として誕生したパラソル。

日光写真ワークショップ

2016.06.01~10.30

自然

織物
道具

農作物

山梨県西桂町

山梨県西桂町は人口 5000 人ほどの小さな町です。
三つ峠山と倉見山に挟まれるように町があり、富士山を一望する景観につつまれた自然豊かな町です。その透明度が高く澄んだ富士の湧き水が、川や水路となって町中をめぐり、水の流れる音が響いています。この水は人々の生活と密接に関係していて、農業、産業、暮らしに使用されてきています。まさに、西桂町には水の町の印象があります。
また、西桂町は織物産業が盛んで、町には 17 軒の機織り工場があります。授業で見学させて頂いた槙田商店さんは、江戸時代末期から続く老舗で、傘を中心に様々な服地の生産をしています。ジャガード織りという高い技術で織られた新しいデザインの傘や、貴重な古い生地を見せて頂きました。
学生たちは町を歩きながら観察を繰り返しながら撮影をしてきました。そのような写真を通じた町の記録と共に、写真と町の特色である織物産業で地域デザインを表現できないかと構想し、サイアノという日光写真でのワークショップも試みました。

サイアノ

サイアノ（日光写真、青写真）とは、写真の起源とも言われているフォトグラムの一種です。フォトグラムはレンズを使わずに写し撮るものを直に印画紙の上に置き、光を当て転写させる技法です。クエン酸鉄アンモニウムと赤血塩を水に溶いた鉄塩混合液を紙や布に塗った後、そこにモチーフとなるものを置いて太陽光による紫外線露光によって化学反応を起こすことで像が現れます。紫外線の強さによりますが、晴天であれば 10 ~ 20 分、曇天であれば 30 分以上そのままにします。影になった部分や印画紙と密着している部分は白く、感光した部分は青くなります。直におくだけでなく影などを転写することもできたり、印画紙とモチーフに距離をつけることで 濃淡を表現したりすることもできます。
紫外線の量や、感光時間によっても青の濃さがかわってきます。薬品を染み込ませてすぐは蛍光黄色のような色をしていますが、光を浴びることによってだんだんと緑がかり、水洗をすると鮮やかな青色に変わります。
今回、布に転写をするのは初めての試みでした。薬品が染み込むようにと試作を繰り返し、槙田商店さんからいただいたシルク混合生地を使用することになりました。
布に転写をすることで、紙とは違う質感や濃淡を生むことができました。

東京都墨田区向島（82日間長屋プロジェクト／2017年度）

築90年の空き長屋での学生の写真インスタレーション。

墨田区京島には太平洋戦争前の長屋が点在し、そこを運用する社会連携先の不動産会社の方と長屋での記念写真。

長屋での展示。近くの町工場をドキュメントした学生作品。

イベントとして、地域住民やまちづくり関連の方、学生のスライドトークのほか、長屋でのシンポジウムを開催した。

東京都青梅市（ギャラリー繭蔵、青龍 kibakoとの社会連携／2018年度〜2020年度）

かつて青梅の地場産業だった青梅夜具地（布団地）をコラージュし、地域デザインとして提出された戸引春香の作品。（2018年度）

元織物倉庫を改装した、ダイニング&ギャラリー繭蔵外観。

2018年度エリアスタディ成果展（ギャラリー繭蔵）

繊維産業で栄えた青梅に残る元工場（SAKURAファクトリー）で、社会連携先の方との記念写真。（2018年度）

昭和50年代初頭の旧青梅街道を撮影した宮崎廷氏と、現代の同じ街道を撮影した石田宗一郎の写真を比較展示した。（2019年度）

多摩川上流平溝川の浅瀬を捉えた、これまでにない岩渕桃子の水中写真。（2020年度）

戦後70年余り、青梅の民俗行事や日常を撮影された宮崎廷氏の写真についてお話を聞いた。（2019年度）